

オリサストロビン粒剤の育苗箱施用によるイネいもち病防除効果

〔要約〕新規登録殺菌剤オリサストロビンの育苗箱施用は、葉いもちに対して防除効果が高い。また、穂いもちに対しても防除効果が持続し、収量を確保することができる。

農業総合センター農業研究所

成果区分

普及（情報）

1．背景・ねらい

いもち病は本県で最も問題となる水稲病害であり、平成5年、15年の冷害年には本病が多発し、収量および品質の低下を招いた。いもち病を効率的に防除するため、新規に登録された育苗箱施用薬剤の防除効果を明らかにする。

2．成果の内容・特徴

- 1) オリサストロビン粒剤を育苗箱に施用して移植すると、葉いもちの発生時期が遅くなり、多発生条件下においても葉いもちの進展を抑制できる。また、穂いもちに対しても防除効果が持続する（図1）。
- 2) 現地の常発地域において、慣行薬剤であるカルプロパミド粒剤の育苗箱施用と比較した結果、オリサストロビン粒剤の育苗箱施は葉いもちの進展を抑制し、高い防除効果が得られる。また、穂いもちの発生も少ない（図2）。
- 3) 穂いもちの発病を抑制することにより、収量を確保することができる（表1）。

3．成果の活用面・留意点

- 1) 平成19年の試験結果である。
- 2) 従来薬剤に比較して残効が長いため、出穂期以降に好天が続く場合は、穂いもちの防除を省略できる。ただし、常発地で葉いもちの発生が多くなった場合や、降雨が続くなど、穂いもちの多発生が予想される場合は防除が必要である。
- 3) オリサストロビン含有する育苗箱施用薬剤で市販されているものは、殺虫剤との混合剤である。本田用のオリサストロビン粒剤（単剤）とは区別して使用する。
- 4) 連用により薬剤耐性菌が発生する恐れがあるので、オリサストロビン剤の使用は1作1回が望ましい。また、本剤を使用した場合には、同系統の薬剤（アゾキシストロビン、メトミノストロビン）を本田で使用しないことが望ましい。
- 5) 本成果に記載された薬剤は、イネのいもち病に対して登録がある（平成20年1月現在）。

4. 具体的データ

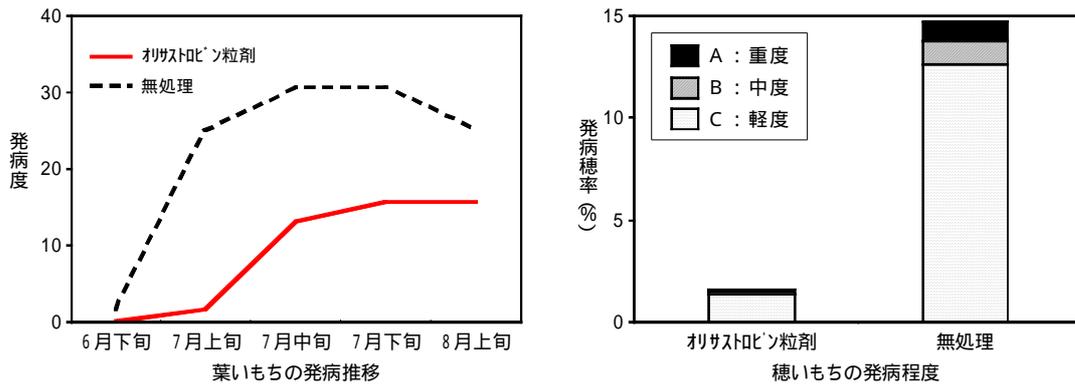


図1 イネいもち病に対するオリサストロピン粒剤の育苗箱施用による防除効果（平成19年、農業研究所）
 品種：コシヒカリ、移植日：5月11日、出穂期：8月9日、いもち病の発生を促すため基肥窒素量10kg / 10aの多肥条件下（追肥無し）で試験を行った。オリサストロピン粒剤区はクロチアニジン・オリサストロピン粒剤を、無処理区はクロチアニジン粒剤を移植当日に施用した。
 葉いもち発病度 = $(4A + 3B + 2C + D) / (4 \times \text{調査株数}) \times 100$
 A：下葉は枯死し、ずりこみ症状を呈する株数。B：かなり病斑が見られ軽いずりこみ症状を呈する株数。
 C：病斑がかなり見られる株数。D：病斑がわずかに見られる株数。E：発病していない株数。
 穂いもち発病程度
 A 重度：穂首、みご等が発病し白穂となった穂。B 中度：初数の1 / 3以上が枯死した穂。
 C 軽度：3粒 - 1 / 3が枯死した穂

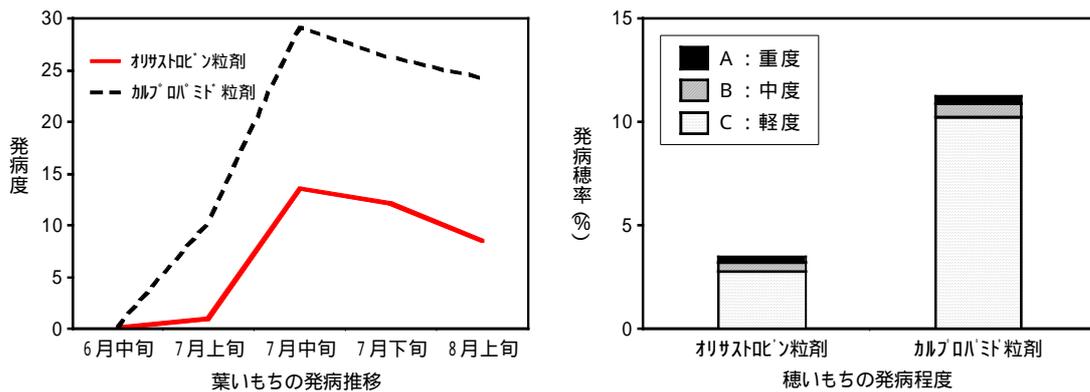


図2 いもち病常発地におけるオリサストロピン粒剤の育苗箱施用による防除効果（平成19年、常陸大宮市）
 品種：コシヒカリ、移植日：5月14日、基肥窒素量：2.4kg / 10a（追肥無し）
 オリサストロピン区はフィプロニル・オリサストロピン粒剤を、カルプロパミド区はクロチアニジン・カルプロパミド粒剤を移植当日に施用した。
 穂いもちの防除は、8月7日にアゾキシストロピン水和剤を無人ヘリで散布した。

表1 オリサストロピン粒剤育苗箱施用圃場の収量および千粒重

供試薬剤	農業研究所（図1圃場）		常陸大宮市（図2圃場）	
	玄米重 (g / m ²)	千粒重 (g)	玄米重 (g / m ²)	千粒重 (g)
オリサストロピン	602	21.8	635	20.6
カルプロパミド	-	-	508	20.6
無処理	490	21.0	-	-

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

水稲病害虫の発生に応じた地域対応型防除体系の確立・平成19～21年・水稲研究チーム、病虫研究室